

話し合いによる学び合いを行える学級を目指して

～スモールステップを踏まえた指導と実践のプロセスの明確化への試み～

中之条町立中之条小学校 教諭 増田 和明

1.はじめに

本実践は、小学校第3学年において教師の司会で行う「話し合い」によって学び合えることを学級づくり・授業づくりの中心に据え、1学期にはそれができるようになるための指導を、2学期はそれによる授業実践を行っていった記録である。

2.基本的な考えかた

(1)学び合いの意義

学習においては、児童自身の思考活動による理解を通して知識を習得することが重要である。単なる知識の注入だけでは、活用できる真の知識にはならない。ただ、自分一人の力では、考えを深める中で理解を深めていくことは難しい。だからこそ、学校教育でしかできない、学級や小集団で多様な意見を交流する「学び合い」が重要になるのである。

学び合いには様々な形態があるが、自分が主に取り組んでいるのは、教師の司会によって児童全員が参加する「話し合い」である。これは、児童の発言を教師が意図的に「引き出し、練り合い、返す」ことによって集団思考を焦点化させられることから、他の学び合いと比して児童一人ひとりの考えをより深めさせることができる。さらにこれ以外にも、KJ法的な活動や説明活動、ポスターセッションなどの学び合いも行っている。

(2)PISA型読解力と話し合い

「生徒の学習到達度調査」の結果が公表され、我が国の子供たちは「PISA型読解力」^{reading literacy}がかなり低いことが明確になった。そのため、文部科学省から「読解力向上に関する指導資料 ～PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向～」が出されるなど、この力の育成の必要性が叫ばれるようになった。また、今年度末に改訂予定の学習指導要領のキーワードは「言葉の重視と体験の充実」であるが、この「言葉」とは単なるコミュニケーションの手段でなく「思考そのもの」を意味している。この言葉＝思考の重視という点からも、このPISA型読解力は今後の教育で重きを置かれていくことは明らかである。

PISA型読解力は、input, process, outcome の三つのプロセスからなる。特にこのoutcome は、古くからの日本の学力観である「読み、書き、そろばん」にはない概念で、「相手との関係」が学力にとって大きな意味を持つことを示している。このoutcome を学習の中心とするのが、「相手」の存在を前提とした集団による学習、すなわち学び合いである。そして、学び合いの一つである「話し合い」における個人の活動、すなわち「友達の意見を聞く」「自分の考えと比較する」「友達の意見に関連させて、自分の考えを他人にわかるように発言する」は、上記のPISA型読解力の三つのプロセスに対応している。特に、話し合いを進める原動力がoutcome に相当するものであることから、話し合いは線形テキスト、特に音声言語におけるPISA型読解力を高めるうえで有効であると言える。

(3)話し合いを機能させるための、長期的視野に立ったスモールステップの必要性

話し合いを始めとする学び合いは、しようとしてもすぐにできるものではない。話し合いを成立させるには、長期的な視野に立った、スモールステップを踏まえた継続的な取り組みが必要である。このスモールステップの中には、普段の授業での日常的な取り組みは勿論、時間を特設して行うアクティビティなども含まれる。指導者がこれを意識して積み上げていくことによって、話し合いの方法を児童が体得し、学習形態の一つとして機能するようになる。そして、児童自身がその有効性を認識して主体的に取り組むようになることによって、話し合いは本物となり、深まりのあるものとなるのである。

(4) 今までの取り組みと今年度前半の個人研修について

教員になって2校目の倉渕村立（現高崎市立）川浦小学校で、自分はこの話し合いを学習に取り入れ始めた。それから約20年の間、小学1年生から中学3年生までの義務教育の全過程の担任をする中で、児童・生徒の発達の段階等に応じた話し合いを実践してきた。その中で、話し合いによる集団思考は小学校中学年でも十分に行えることや、同じ形態の話し合いでも、学年が上になれば内容により深まりを持たせていけることが分かってきた。

そして今年度は、話し合いによる集団思考を成立させることのできる下限に近い学年である、小学3年生の担任となった。さらに、4学級から3学級へと編成替えされたことにより、一から学級づくり・授業づくりを行う機会に恵まれた。そこで、話し合いを成立させるための指導と授業での具体的実践の中で、他の人でも行えるようにプロセスを明確化し体系化させることを今年度前半の個人研修のテーマとした。そして、それをまとめたのが本論である。

なお、以下に出てくるアクティビティや話し合いの形態の名称の多くは、平成15～17年度に本校が群馬県教育委員会指定の教育課程研究開発校となった時に、今まで自分が実践してきたものに理科部会が名前を付けたものである。また、今年度後半の個人研修は「*fortune line* 運勢ライン法」の理科における実践としたが、これも別の機会に報告したい。

発言アンケート（__月__日）

3年 組__番 名前_____

①あなたは、じゅ業中に発言をしますか。
Aよくする Bする Cあまりしない Dしない

②発言することは楽しいですか。
Aとても楽しい B楽しい Cあまり楽しくない D楽しくない

③あなたは、友だちの発言を聞きますか。
Aよく聞く B聞く Cあまり聞かない D聞かない

④友だちの発言を聞くのは楽しいですか。
Aとても楽しい B楽しい Cあまり楽しくない D楽しくない

⑤あなたは、友だちの発言を参考にして考えますか。
Aよく参考にする B参考にする Cあまり参考にしない D参考にしない

⑥友だちの発言を聞いて、自分の意見を変えることはありますか。
Aよくある Bある Cあまりない Dない

2. 年度当初の児童の実態

(1) 学級の実態

小学校第3学年の本学級は、男子13名女子16名の計30名である。男女の仲はよく、素直で学習にも前向きである。男子は全体的に大人しいのに対して、女子はしっかり者が多い。

(2) 年度当初の児童の実態

話し合いにおける実践の中で、それによる児童の実態の変容を捉えていくため、同じアンケートを1～2ヶ月に1回のペースで行うことにした。図1がそのアンケートである。

最初に行ったのが始業式から2日目で、「発言をしますか」「発言は楽しいですか」のどちらも、最も多いのは「あまりしない」で16人（53.3%）だった。さらに、話し合いによって考えを深めるために必要な「友達の発言を聞く」「友達の発言を参考に考える」「友達の発言を聞いて自分の考えを変える」の三つは、図2～4のようになった。このように、年度当初のこの学級の児童は、発言にはあまり積極的ではなく、発言をしても教師に対してのものであり、友達の意見を聞く態度はほとんどなかった。そのため、友達の発言を参考に考えを深めようと言う意識もないのが実態だった。

3. 話し合いを中心とした、学び合いについての構想

図1 発言アンケート

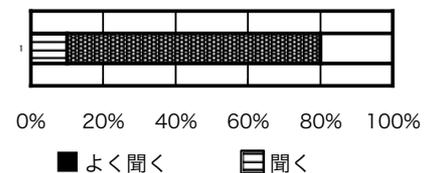


図2 友達の発言を聞きますか

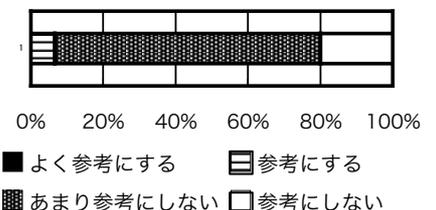


図3 友達の発言を参考に考えますか

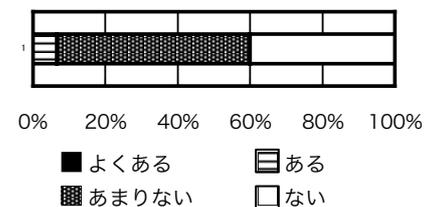


図4 友達の発言を聞いて自分の考えを変えますか

上記のような、年度当初の児童の実態から、次のような構想を立てた。

- ・1学期当初から、安心して発言できる学級の雰囲気づくりを行う。
- ・1学期中に、発言のしかたなどの基本的な学習習慣から始まり、発言をつなげるまでの話し合いを成立させるための基盤づくりを行う。

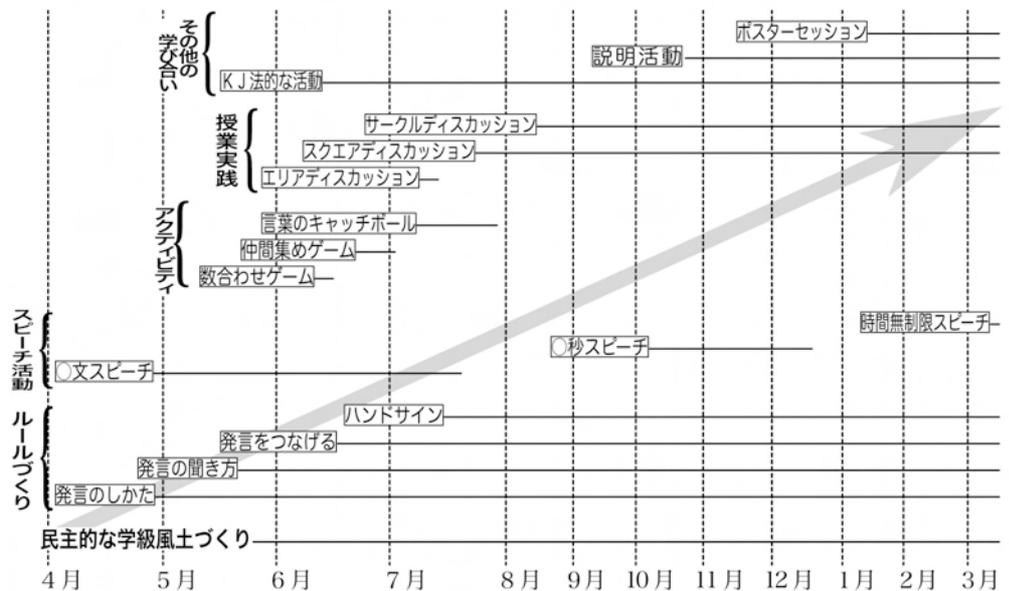


図5 話し合いの指導と実践における構想図 / 指導のマニュアル

培うと共に、話し合いの面白さや大切さをアクティビティで実感させていく。そしてこれらは全て、スモールステップを踏んでいく。

- ・5月下旬から話し合いを授業に取り入れ始め、2学期には積極的に活用していく。なお、この話し合いの形態もスモールステップをふまえて、徐々に本格的なものにしていく。
 - ・その他の学び合いとして、1学期に「KJ法的な活動」を、2学期に「説明活動」と「ポスターセッション」を取り入れていく。
- 以上の構想を図に表すと、図5のようになる。

4. 「話し合い」に関する具体的な実践

(1)実践その1 民主的な学級風土づくり

話し合いなどの学び合いを行うための基盤となるのは、多様な考えを自由に表明し合い、それを素直に受け入れられる、民主的な学級風土である。それによって、ただ発言するだけでなく、互いに聞き合う学習態度が育成され、みんなで考え合う集団思考を行っていきけるようになる。このような学級づくりのために、年度当初から、全教科・領域はもとより学級での生活全般において、次のようなことを行っていった。

- ・発言や会話の時に児童が自分の言葉で話せるように、言葉に詰まった時も聞く態度を崩さず、辛抱強く待つ。それでも言えない場合は、優しくリードを試みていく。
- ・授業中に発言した児童に対しては、必ずコメントを返すことでその行為を認めていく。
- ・どのような発言に対しても、肯定的に受け入れる態度を示すことで、発言者に安心感を持たせる。さらに、発言者や発言内容を笑ったりする児童に対しては毅然とした態度で臨むことにより、どのような発言でも大切にすべきであることを児童に示していく。
- ・言いたいことを十分に伝え切れない発言に対しては、補助質問によって内容をはっきりさせる。さらに、それをわかりやすくまとめて返してやることによって、それを聞いている他の児童だけでなく、発言者自身にとっても言いたいこと明確にさせていく。

このような取り組みを常時行っていくことで、互いを認め合う、発言しやすい雰囲気が徐々に形作られていった。しかし、発言の方はさほど増えず、それも依然として教師に向かってのものだった。そこで、この学級の雰囲気の上に立って、図5にあるような発言のルールづくり、スピーチ活動、話し合いに関するアクティビティを行っていった。

(2)実践その2 スモールステップによる発言のルールづくり

話し合いが成立する前提としては、きちんとした発言ができることと、それを互いに聞き合えることが必要である。それができるようになるためには、どうしても最初は形から

入っていかざるを得ない。そこで、それに関するルールづくりをスモールステップを踏んで行っていった。これは、朝の短学活において内容を伝えた後は、普段の授業において常に児童に意識させることによって徹底させていった。

a. スモールステップ① 発言の終わり方の徹底

年度当初は、児童のほとんどが「ハイハイハイ」と無闇に声を上げ、発言は「5」等の単語のみというのが実態だった。そこで、新年度も第2週となって学習が軌道に乗ったところで、まずは発言の終わり方について次のようなルールを導入した。

- ・自信のある時は、「～です。」という形で発言を終わりにする。
- ・自信がない時は、「～だと思います。」という形で発言を終わりにする。

最初は言い忘れる児童も多かったが、その時には「何か言い忘れてるよ」などと温和に指摘することで、発言に対する拒絶感を持たせないような配慮をしていった。さらに、周囲の児童が「ほら、『です』って言って、言って」と優しく促す暖かい雰囲気形成されたことも、大きなプラスとなった。このようなことを通して、あまり時間もかからずに、発言の終わり方は徹底されていった。ただ、発言の声は、全体的に小さいものだった。

b. スモールステップ② 発言を聞く態度づくり

4月下旬となり、学級が前述のような民主的な雰囲気になってきた。そこで、発言は友達に向かってするものであり、それを聞くことが授業なのだと言う意識を徹底させるために、次のことを二つ目のルールとして導入した。

- ・発言者は、他の児童の方を向いて発言する。
- ・他の児童は、発言者の方を向いて発言を聞く。

なお、発言者は単に他の児童の方を向くだけでなく、みんなが自分を見ていることを確認し、必要とあれば友達に注意をしてから発言をするようにさせた。これに違和感を感じる児童もいたが、この学習習慣が定着するにつれて、自分が友達みんなに見られる中で発言するということが、今までにない発言への意欲に結びついていった。そして、発言の数が増えるとともに、みんなを注目させることへの強いこだわりを見せる児童が多くなった。

ただ、発言者がまわりを確認することなどに時間がかかり、授業の進行のペースは落ちてきた。けれども、児童が自分たちで聞き合う態度を作り上げていくために、教師は可能な限り待つようにした。なお、児童が注目しているので発言の声が小さくても十分に聞き取れることから、声の大きさについてはそれほど細かくは指導する必要はなかった。

c. スモールステップ③ 発言を繋げる習慣づくり

次に、発言を聞くだけでなく、それを自分の考えと比べることができるように、図6のような発言の繋げかたを5月の半ばに導入した。最初は言い忘れる児童も多かったが、児童が互い指摘し合うことで、発言の際には友達の名前が挙げられるようになった。そして、自分の発言に言及された児童は学級における自分の存在感を実感するようになり、今まで以上に言葉を選んで発言するようになった。ただ、必要ない時にも「同じ発言」が何回も発言されるようになったので、教師が『ほかの意見』を求めた時には「同じ発言」を言ってもいいこととし、『別の意見』を求めた時には「同じ発言」は言わないとい

学習・学校生活ルールブック

発言のつなげかた

～発言をつなげて、みんなで考えよう～

- ① 友だちの意見と同じ時は・・・
「**ぼく(わたし)は～くん(さん)と同じで、～です。その理由は～です。**」
・友だちと同じ意見でも、理由が少しでもちがっていても自分の意見として発言しましょう。
- ② 友だちの意見とちがう時は・・・
「**ぼく(わたし)は～くん(さん)とちがって、～です。その理由は～です。**」
・友だちとちがう意見を言う時は、その理由をきちんと言うようにしましょう。
- ③ 友だちの意見で自分の考えが変わった時は・・・
「**ぼく(わたし)は～くん(さん)の意見で～に変わりました。その理由は～です。**」
・自分の意見を変えることは、はずかしいことではありません。理由をどうどうと伝えて変えましょう。



図6 発言のつなげ方

うルールを追加していった。

d. スモールステップ④ ハンドサインの導入

6月になると、話し合いの形態におけるスモールステップの第2段である、「スクエアディスカッション」（後述）が行われるようになった。そこで、発言する前から自分の立場をはっきりさせるために、手を上げる時には次のハンドサインをするように定めた。

- ・前の発言と賛成の場合：Vサイン
- ・前の発言と反対の場合：グー
- ・自分の意見を変える場合：人差し指を立てる
- ・今までとは別の意見：パー

これによって、話し合いによって意見を絡み合わせることが以前よりも容易になった。

(3)実践その3 スモールステップによるスピーチ活動の充実

発言のルールづくりと同時に、児童自身の話す力を高めるために、朝の会で日直が行うスピーチ活動を始めた。発言のルールづくりは1学期に完成を目指したのに対して、こちらは学期ごとに1年をかけてのスモールステップを踏む予定とした。

a. スモールステップ① 「○文スピーチ」（1学期）

年度当初は、全員の前ではほとんど話すことができない児童が多かった。そこでまず初めは、あるテーマについて3文で話す「3文スピーチ」から始めた。1番最初のテーマは「自分の好きな食べ物」としたが、何テーマか行って児童が慣れると、「5文」「7文」とスピーチの量を増やしていった。このように徐々に長くしていくことで、児童の話すことへの抵抗は少なくなり、1学期末には「11文スピーチ」をほぼ全員ができるまでになった。

b. スモールステップ② 「○秒スピーチ」（2学期）

2学期は、文の数でなく秒数でのスピーチ活動とした。最初は「30秒スピーチ」としたが、11文を言える児童にとってはこれはもう短いものだった。そこで、「40秒」「50秒」と伸ばしていった。2学期末には「1分以上スピーチ」に挑戦させる予定でいる。

c. スモールステップ③ 「時間無制限スピーチ」（3学期）

3学期は、スピーチし続けた時間を計る「時間無制限スピーチ」を行う予定でいる。昨年度の、第4学年における同様の取り組みでは、3分を超えた児童が何人も出る結果となった。そこで、今年度もどの程度まで時間が伸びるかを楽しみにしている。

(4)実践その4 アクティビティの実施

「指導」が中心の発言のルールづくりに対して、話し合いの大切さと面白さを「体験」し「実感」させるためのアクティビティも、次のようなスモールステップで行っていった。

a. アクティビティ① 数合わせゲーム

発言を聞く態度づくりを行っている5月上旬に、学び合いを行うための最初のアクティビティである「数合わせゲーム」を行った。これは、発言をもとに考え合うことの前段階として、互いの意見を知って同じものを自分たちでまとめることを体験させるものである。なお、このアクティビティは、学び合いの別の方法である「KJ法的な活動」の導入も兼ねている。

これは、次のように行う。

- ①何組か同じ数字を書いたカードを、裏返しのまま1枚ずつ児童に配る。
- ②児童は自分のカードの数字を確認した後、声を出さずに見せ合う。
- ③同じ数字の者同士が集まったら、黒板のところへ行ってカードをはる。そして、チョークでカード全部を囲む線を書いて、その数字を書く。

この活動は単純なので、児童はすぐにできるようになった。そこで、数字を自分で決めてカードに書くなどの応用も行っていた。

b. アクティビティ② 仲間集めゲーム

これは「数合わせゲーム」の発展で、同じ者がただ集まるのではなく、似たものを自分たちで判断してグルーピングしていくことを目指した活動として、5月中旬から行った。

これは、次のようにして行う。

- ①白紙のカードに、例えば自分の好きな食べ物を一つ書く。
- ②互いに見せ合って、同じグループになる食べ物を書いた者同士で集まる。
※「ラーメン」と「そば」は同じグループかなどといった判断は、児童にまかせる。
- ③グループができたら、黒板のところへ行ってカードをはる。そして、チョークでそのカード全部を囲む線を書き、食べ物のグループ名を書いてから着席する。
- ④全員が着席したら、各グループを見渡し、さらに統合できるものはないかを探っていく。
このアクティビティを数回行うことにより、児童は友達の意見に以前より興味を持ち初め、さらに自分の意見と比べて判断することがスムーズにできるようになった。

c. アクティビティ③ 言葉のチャッチボール

これは、話し合いにおいて「意見を出し合うことのおもしろさ」と「対立する意見を出すことの必要性」、さらに「意見の根拠を言うことの大切さ」を実感させるためのアクティビティである。発言を繋げることに慣れてきた5月下旬から、機会あるごとに行った。
これは、次のように行う。

- ①あい対する二つの項目を決める。（例えば「ご飯」と「パン」など）
- ②学級が左右二つのチームに分かれて互いに向き合う。次に代表がジャンケンをして、項目と先攻後攻を決める。
- ③自分がそれが好きだとして、その根拠を考える。必要に応じて相談したりメモを取る。
- ④先攻のチームが挙手し、1人が発言する。例えば「私はパンが好きです。その理由は、サンドイッチは色々挟めるからです。」
- ⑤後攻のチームが挙手し、1人が発言する。例えば「ぼくは～さんに反対です。その理由は、ご飯だっておむすびにすれば、中に色々入れられるからです。」
- ⑥15分程度、交互に一人ずつ発言する。
- ⑦チームの立場を逆転して、後半戦を行う。

なお、勝敗は次のようにして決定する。

- ・チームとしては、発言した児童の実人数（延べ人数ではない）の多い方が勝ち。
- ・個人としては、1回反対意見を言われると1点とし、点数の1番多い児童が1位とする。

ほぼ1ヶ月の間、このアクティビティに親しむことにより、対立する意見が出ないと議論が進まないことに児童は気づき始め、意欲的に友達に反対するようになってきた。そして1学期末には、「主張したいこと」と「その根拠」を明確に分けて発言できるようになり、その根拠も筋道の通った説得力のあるものとなってきた。その結果、互いの発言が絡み合うようになり、舌戦を楽しんで行うようになった。それと共に、普段の授業における発言も積極的になり、今まで以上に友達の意見に言及するようになった。また、学級での人間関係にあまり左右されずに、きちんと反対意見を言えるようになった。

(5)実践その5 話し合いの形態におけるスモールステップ

以上のような実践の積み重ねによって、児童は積極的に発言するだけでなく、根拠を中心に自分の考えと比較しながら互いに聞き合う中で、必要とあれば反論できるようになった。そこで、授業に話し合いを導入するにおいても、スモールステップを踏んでいった。なお、教師は「コーディネータ」として、意図的に児童の発言を引き出し、繋げ、返すことで、話し合いの内容をより深めていくように心がけた。

a. スモールステップ① エリアディスカッション

アクティビティ「言葉のキャッチボール」を始めた5月下旬に、最初の話し合いの形態として「エリアディスカッション」を授業に取り入れた。これは、陣地という形で互いの立場を明確にすると共に、各陣地間の行き来という陣取り合戦的な要素も加えた、低・中学年向きに考え出したものである。

事前の準備として、多目的ホール等の広い場所に必要な数だけ陣地を事前に作っておいてから（図7）、次のように行う。

- ① 児童一人一人が、各陣地の中から正しいと思うものを選び、そこに移動する。
- ② 互いに向き合って、発言し合う。
- ③ 話し合いの途中で自分の考えが変わった者は、そのことを発言して陣地を移動する。

今年度は、予想より早く児童が自分の立場を踏まえて発言ができるようになったことに加え、準備に手間がかかるために、これはあまり行わずに次のステップへ移行した。

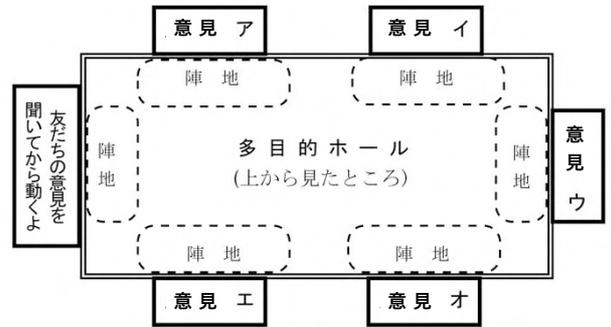


図7 エリアディスカッションの模式図

b. スモールステップ② スクエアディスカッション

これは、学級会などでよく使われる児童の机を方形に並べて行う話し合いであるが、話し合いのスモールステップの流れの中でこう名付けた。6月からの学級会は、この形式で行っていった。なお、エリアディスカッションに比べて一人一人の児童の立場が把握しにくいことから、発言のルールづくりのスモールステップ④であるハンドサインは、この形態のために導入したものである。

c. スモールステップ③ サークルディスカッション

これが話し合いの最終形態で、アクティビティ「言葉のキャッチボール」の後を受ける形で、6月から授業で実践していった。

これは、次のように行う。

- ① 自分の立場（自分の意見とそれについての^{コミットメント}自信）を黒板に示す。

※ この方法「コミットメント法」も、機会を改めて発表したい。

- ② 黒板の前に半円形に集まる（図8）。
- ③ それぞれの立場から意見を出し合う。この時、教師は話し合いをコーディネートしていくことにより、互いの立場の「根拠」の違いについての話し合いとなるようにしていく。
- ④ 考えが変わった児童は前に出てきて、それをみんなに告げてから、自分の立場を変える。

このサークルディスカッションによって、友達の考えに反論するだけでなく、納得すれば自分の考えを素直に変えるようになった。このように、話し合いの中で出された多様な意見をその根拠に注目して比べ、より納得する意見に立場を変えることにより、児童は一人の時よりも考えを深めることができるようになった。

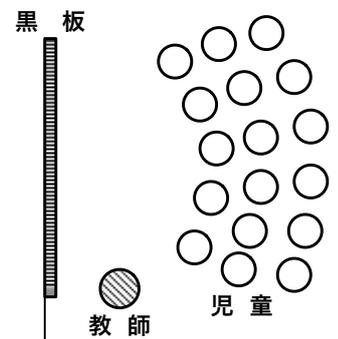


図8 サークルディスカッションの模式図

5. 具体的な授業場面

上記のようなスモールステップにより、5月下旬から授業の中に話し合いを取り入れることができるようになった。例えば6月17日の計画訪問では、「お楽しみ会で行うことを決めよう」というテーマでの学級会を、スクエアディスカッションで行った。

そして2学期には、サークルディスカッションを積極的に授業に取り入れていった。次は、10月4日に行った理科の「光を当てよう」の第2次「鏡で反射させた日光を当てた所の暖かさ」での話し合いの抜粋である。実験前の予想を立てる段階において、児童は「熱くなる」「温かくなる」「少し暖かくなる」「変わらない」「冷たくなる」の五つの立場に分かれて、次のように話し合った。

（前略）

A女「私は、『少し暖かくなる』に賛成です。その理由は、私は鏡で光をはね返したことがあって、その時少し暖かくなったことがあるからです。それをお母さんに話したら、よく気付いたねって言っていました。」

B女「私もAさんに賛成です。その理由は、日なたは日光が当たって温度が高くなっていたから、これも少し暖かくなると思うからです。」

C男「ぼくはAさんに反対です。壁はさわったら冷たかったから、日光を当てても冷たいままだと思います。」

D男「ぼくはBさんに反対で、『熱くなる』と思います。理由は、ゲームディスクを日なたに出しておいたら、熱くなったことがあったからです。」

E女「私は『変わらない』から『少し暖かくなる』に移動します。その理由は、私もAさんのようなことがあったからです。」

(後略)

このような話し合いを約25分続けた結果、7人の児童が自分の予想を変更し、更に18人が自分の予想に対しての自信コミットメントを高めた。このことは、話し合いをすることによって、児童が自分たち集団の力で互いの意見を吟味し、それをもとに一人一人が考えをより深めていったことをよく表している。

6. その他の学び合いにおける取り組み

今年度は話し合いの他に、図5にもあるような次の学び合いを行っていった。

(1) KJ法的な活動

これは、文化人類学者の川喜田教授がデータをまとめるために考案したKJ法を、児童にも使えるようにアレンジしたものである。アクティビティ「仲間集めゲーム」を受け、5月中旬から、意見をまとめたり児童のグルーピングをする時に使用した。例えば、10月4日に行った栄養職員とのTTによる学級活動「好ききらいなく食べよう」では、児童がその日の給食の材料を三つの栄養群に分ける時に、この方法を使っていった。

(2) 説明活動

これは、筑波大学付属小学校の森田教諭が提唱しているもので、理科の問題解決活動の終末において、学んだことを自分の言葉でまとめて説明し合うことにより、理解をより深めていく活動である。サークルディスカッションなどによって、自分の考えを音声言語によって表す力がついてきたことを受け、記述言語によるPISA型読解力の育成も兼ねて、9月上旬から理科の学習で取り組んでいる。

(3) ポスターセッション

元々これは、学会においてたくさんの発表を同時に行うために使われる方法であり、最近では4年生の国語の教科書(教育出版)にも紹介されている。3年生は、総合的な学習の時間「なかんじょタイム」では「やさしくくわしくなろう」というテーマで調べ学習などを行ってきたが、2学期末に行うその発表をポスターセッションで行う予定でいる。

7. 児童の実態の変容

4月当初と5月下旬では、前述のアンケートの全項目において大きな変容が見られ、以後も変化が続いたことから、本実践の効果が確かめられた(図9~14)。これらを個別に見ると、次のようになる。

まず、発言する態度が身に付くと共に、発言をしたり聞いたりすることを楽しく感じるようになった(図9、10、12)。特に発言すること(図9)は、5月から9月まで変化が継続しているが、5月は発言を繋げる習慣を付けている時期、9月は授業での話し合いが軌道に乗ってきた時期と、実践と一致している。一方、7月以降発言を聞くのがあまり楽

しくない児童が増えている（図12）のは、このころから授業での実践が中心となり、根拠を述べるなど児童にとって高度な内容の発言が中心になってきたためと考えられる。

友達の発言を聞く児童は、5月に劇的に変化している（図11）。これは、ルールという「形」から入った友達の発言を聞くことが、学習態度としてきちんと身に付いたことを示している。それ以降は「よく聞く」が減っているが、実際の授業態度は更に良くなっていることから、聞けるようになるにつれ自己評価が厳しくなったためと考えられる。

友達の意見を参考に考えたりそれによって意見を変えること（図13、14）は、話し合いについての指導をしている1学期は変化が継続し、授業での実践に移った2学期はその状態が続いている。これは、一度身に付いた学習態度は、実践が続けば保持されることを示している。

以上のように、本実践の過程と児童の変容の多くがよく対応していることから、この取り組みの高い有効性が伺える。また、この話し合いという活動に、児童が主体的によく取り組んでいることも読み取ることができる。

さらに、クロス集計によって、次のような実態が明確になってきた。（下位群は数が少ないため集計に入れていない）まず、「発言を聞く」ことの方が、「発言する」よりも学力との相関が高いことがわかった（図15、16）。さらに、「友達の意見を参考にしして考える」ことの学力別・月ごとの変化も興味深い。上位群の児童はすぐにこれができるようになったのに

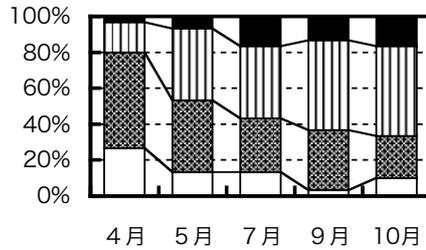


図9 授業中に発言しますか

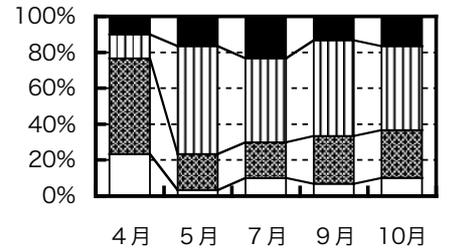


図10 発言は楽しいですか

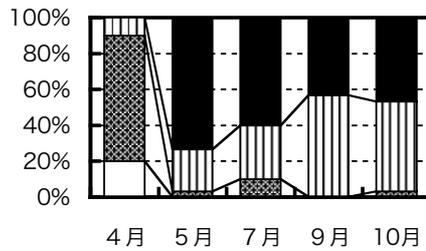


図11 友達の発言を聞きますか

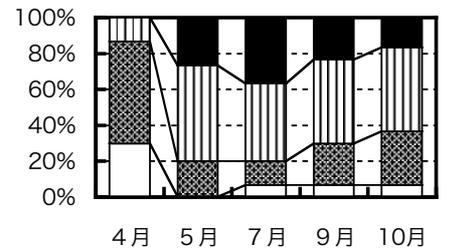


図12 友達の発言を聞くのは楽しいですか

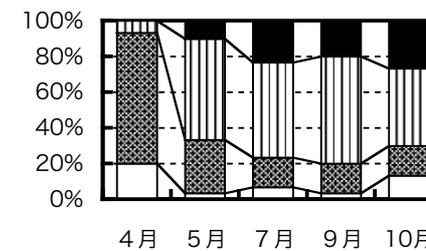


図13 友達の意見を参考に考えますか

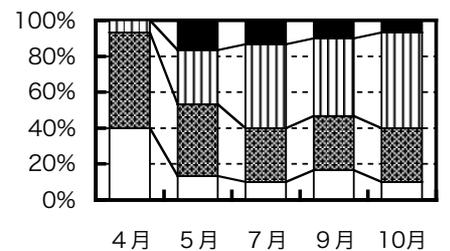


図14 友達の発言で自分の意見を変えますか

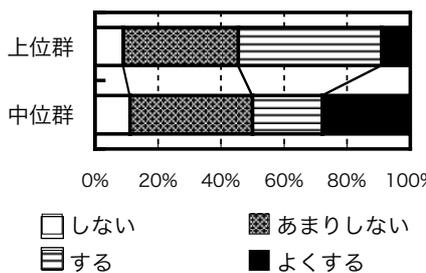


図15 「発言する」と学力の相関

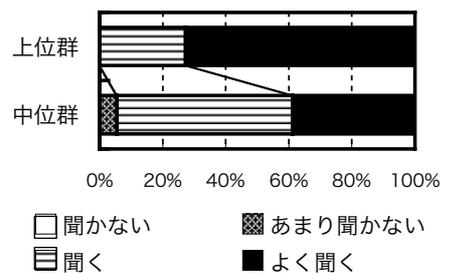


図16 「発言を聞く」と学力の相関

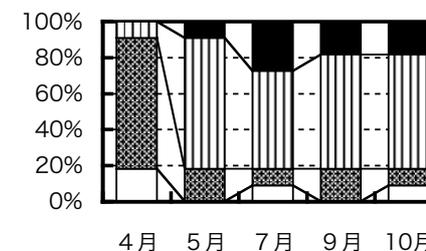


図17 友達の発言を参考にする(上位群)

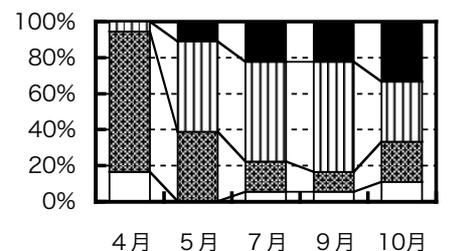


図18 友達の発言を参考にする(中位群)

対して、中位群はそうなるのにより時間がかかっている（前頁図17、18）。この2つは、話し合いで最も基本である友達の意見を聞くことが学力を向上させるうえでも重要であることと、それについて継続して取り組むことが大切であることを示している。なお、下位群の児童も、個々で見れば友達の発言を聞くことが徐々にできるようになってきている。

8. 成果と課題

以上のような実践と分析から、次のような成果が得られた。

- ・ 小学校第3学年においても話し合いは成り立ち、授業で活用できることが確かめられた。
- ・ 話し合いによって児童が自分たちの力で考えを深めることができるようになり、活発で絡み合う意見交流の様子から音声言語におけるPISA型読解力の向上も認められた。
- ・ 話し合いを行えるようになるためのスモールステップを踏んだ指導と、それを基盤にした授業における話し合いの実践により、児童の実態が変容することが確かめられた。
- ・ 話し合い、特に他の児童の意見を聞いて考えさせることが学力の向上に重要であり、その指導を継続することが大切であることの必要性を示すことができた。
- ・ 話し合いにおける指導と実践のプロセスを、図5のように体系化することができた。そして、今後の課題としては、次のようなことが挙げられる。
- ・ より少人数の学級においても、話し合いができるような手だてを開発する。
- ・ 下位群の児童を発言に積極的にさせ、他の児童の発言を参考に考えさせていくための手だてを工夫していく。
- ・ 説明活動などの他の学び合いにおいても、今回の実践のようなスモールステップの体系化を行っていく。

9. 終わりに

今までの教職経験で培ってきた取り組みを体系化することができ、それによる児童の変容も明らかにできたことは、自分にとってはよい一里塚になった。今後もこの取り組みを続けると共に、さらに新しいことにも挑戦していきたい。

参考文献

- ・ 「読解力向上に関する指導資料 ～PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向～」
（文部科学省 平成17年）
- ・ PISA2003（科学的リテラシー）及びTIMSS2003（理科）の結果の分析と指導改善の方向（文部科学省 平成17年）
- ・ 初等教育資料 5月号、6月号（文部科学省 平成18年）
- ・ 読解力向上をめざした授業づくり 中学年（日置光久ほか 東洋館出版 平成18年）
- ・ 科学的読解力を育てる説明活動のレポーター（森田和良 学事出版 平成18年）
- ・ 研究報告書およびその別冊（中之条町立中之条小学校 平成17年）